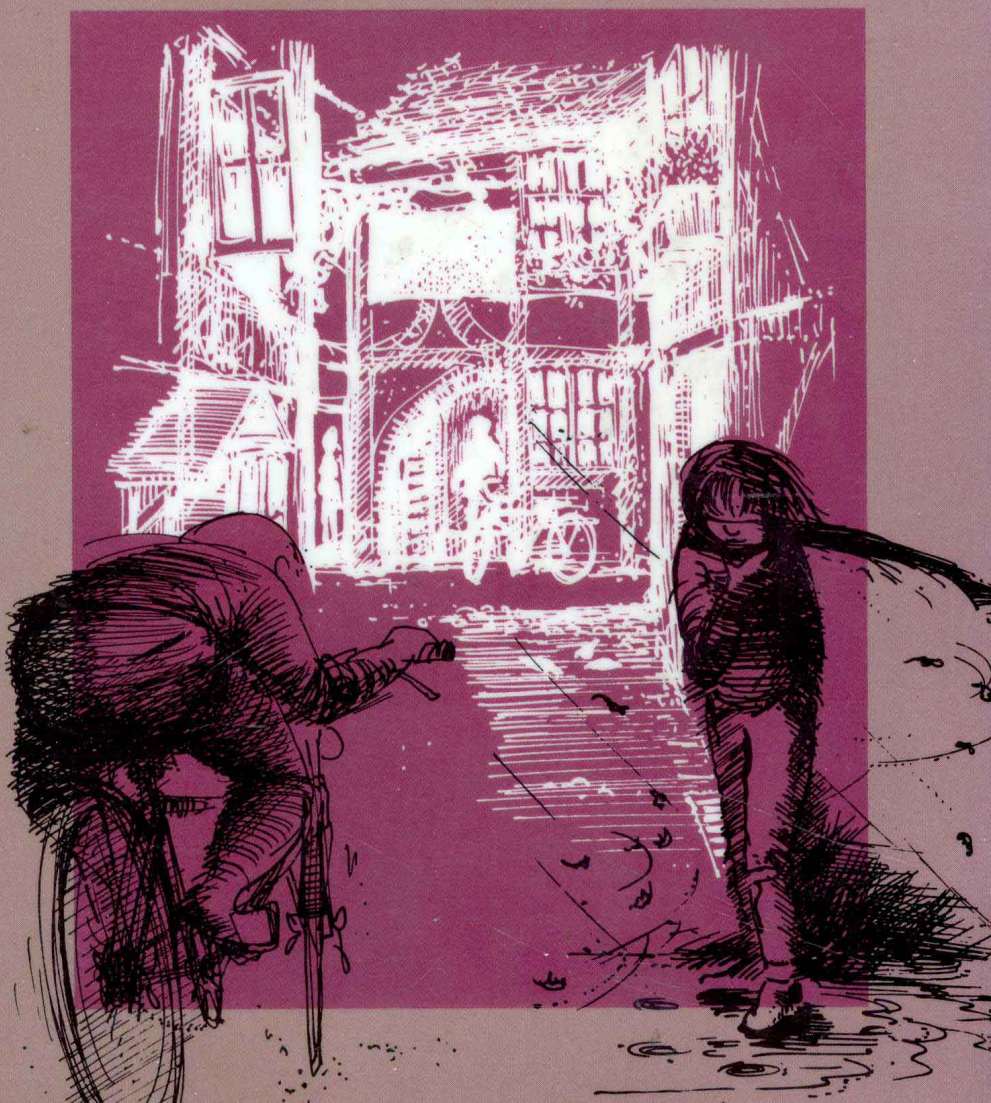
ホース横町の10万人クラブ

G・ルック＝ポーケ作　塩谷太郎訳
M・ヘイワード絵



Bim aus der Schlauchgasse
Text copyright © 1974 Gina Ruck-Pauquèt
Illustrations copyright © 1974 Otto Maier Verlag Ravensburg
Japanese translation rights arranged
with Gina Ruck-Pauquèt
through Japan UNI Agency Inc.

• 世界のどうわ •
ホース横町の10万人クラブ
(NDC : 943)

1980年 7 月31日　第 1 刷発行

作者●ジーナ・ルック＝ポーケ　Gina Ruck-Pauquèt
訳者●塩谷太郎（しおや　たろう）
画家●マイケル・ヘイワード　Michael Hayward
発行者●佐久間裕三
発行所●大日本図書株式会社
東京都中央区銀座 1 丁目 9 番10号
電話・03—561—8671　振替 東京 9 —219番
印刷所●株式会社金羊社　**製本所**●株式会社若林製本工場

ホース横町(よこちょう)の10万人クラブ

ジーナ・ルック＝ポーケ作　塩谷太郎訳
マイケル・ヘイワード絵

世界のどうわ　大日本図書

ホース横町(よこちょう)の10万人クラブ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

ビムがホース横町へまがったとき、雨がはげしくふりだした。

（なんていやな日）と、ビムは思った。

ビムはたまごの紙ぶくろを、べつの手に持ちかえると、まるっこい鼻を上へむけた。ゆがんだ古い家いえのやねのあいだのせまい空が、まるではい色のリボンのように見えた。

ビムはとおりすぎながら五番地の、けいび会社のイェンケさんの家にちょっと目をやり、六番地のまどからのぞいている音楽の先生にあいさつし、それからわが家のげんかんのまえに立った。そのとき、思いがけないことがおこった。紙ぶくろがやぶれて、なかみがみんなころがりでてしまったのだ。

「あらあら！」ビムは指でみだれたブロンドのかみをひっかきまわした。「ほんと

うにいやな日！」

ビムはおこった犬のように、鼻をしかめた。ちょうどこの日から、あるとっぴょうしもないできごとがはじまるのだが、ビムはまだなにも知らなかった。

「パパ！」ビムは大声をはりあげてさけんだ。「パパ、早くきて！」

お父さんのアマデウスは、鉛筆と高くつみあげた原稿用紙をほっぽりだして、とびだしてきた。でも、このぐちゃぐちゃになったたまごを見ては、しかるのもわすれて、いった。

「早くひろいなさい。」

ビムは両手をまっかなズボンにこすりつけた。よくそうするので、ズボンの両わきは、赤いというよりはまっ黒になっていた。でもへいきだった。

「とてもひろえっこないわ。」ビムはいった。

「そうだな。」お父さんはわらった。「もうどうしようもないんなら、なんでさけんだりしたんだ！」

アマデウスさんはとてもかわったお父さんだった。ビムがどんなにひどいかっこうをしていても、すこしも気にしなかった。むすめが男の子のように口笛をふいても、へいきだったし、ときどきかべ紙になにか書いても、ほうっておいた。おまけに、女の子がいるのに、自分でくつ下のあなのつくろいまでした。すじむこうに住んでいた年金ぐらしの女の先生は、いつも、あれは、ホッテントット人のやりかたよといっていたが、お父さんはただわらっていた。ビム親子はしあわせだった。それでじゅうぶんだった。

お母さんさえ生きていたら、こんなことにならなかったにちがいない。でも、かなしいことにお母さんはとっくのむかしに死んで、ビムはお母さんの顔さえおぼえていなかった。

「おいで、もうみんな上にきているよ。」お父さんはいった。

ビムは、雨水といっしょになって、あついでこぼこしたしき石の上をつるつるながれていくたまごにちらっと目をやった。それからたまごのからをひろいあげたが、

すて場にこまって、ズボンのポケットにおしこんだ。そこにはいつもいろんなものがはいっていた。ショートケーキをおしこんだことさえある。

ビムはちょっとからだをゆすって、雨水をはねとばすと、家にはいった。

「パパ、新しい小説書けた？」

「うん、でも、だれも買っちゃくれまいな。」

「へいきよ。だめなら、とうぶん、あらびきムギのおかゆを食べればいいんだから。」

アマデウスさんの小説はほとんど売れなかった。だれも読もうとしなかったのだ。

（偉大な作家って、たいていそうなんだわ）ビムはぜんぶのひきだしをひっかきまわして、くしをさがしながら思った。（でも、いまに有名になれば、みんなわれがちに読みたがるんだわ）

たくさんの売れない原稿の使いみちを、ビムはちゃんと知っていた。古いいすのおれた足の下におしこむことだ。そこなら、じゃまにもならないし、いすもぐらぐらしないですむ。ビムはなんでもじょうずに使うことを知っていた。

ビムはくしをさがすのをあきらめると、ぬれたかみをプップッと鼻の頭からふきとばしながら、せまい暗いかいだんをのぼって、やねうらべやへいった。

そこはクラブの会議室になっていた。ビムが一年まえにつくったクラブで、会員はまだ六人だが、いまにすべての善人たちのクラブになるはずだったから、「10万人クラブ」と名づけられていた。世の中には10万人の、いやそれいじょうの善人がいるはずだと、ビムは思っていた。

会員は、こまっている人はだれでもたすける義務があった。おばあさんにはあたたかいショールをあんであげ、ただでたきぎをわってあげ、はらぺこのねこには食べものをあたえ、小鳥をうついたずらっ子にはびんたをくわせ、いい子にはやさしいことばをかけてやった。

おかげで、あるときは感謝を、あるときは、いたずらっ子たちのしかえしをうけて青あざをこしらえた。会員たち——ビムとビムの親友のマリタと、怪力ペーターとブービと〈ネズミ〉は、おたがいに力をあわせて、どんな困難にもたえた。それ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

からもうひとり、ビムのお父さんのアマデウスさんがいた。お父さんは六番めの会員で、会議にはでなかったけれど、相談役として、なくてはならなかった。

このへやは、ときどきかまの中にいるように暑かったので〝シチューなべ〟といわれていた。お父さんはめったにやってこなかった。けれど、くるたびに、ひくい天じょうのはりに頭をぶつけて、こぶをこしらえ、みんなといっしょにわらった。しかし、とうとうぜんぜんこなくなってしまって、子どもたちは、そのたのしみもあじわえなくなってしまった。

ビムは、かいだんのさいごの二だんをいっきにとびこした。

（そうよ！　あたしたちはきのう、二番地のお年よりの絵かきさんのゆりいすをなおしてあげたわ。あとはあの犬のことだけだけど、それももう問題ないわ）ビムは思った。

しかし、もしこれから先のことを見とおすことができたら、そう安心してもいられなかったろう……。

2

〝シチューなべ〟の中は、うすきみわるいほどしいんとしていた。雨が何千という指さきでトタンやねをたたいているのがきこえるほどしずかだった。

会員たちは窓のところにかたまって、だまって外をながめていた。ビムはなにかしらと、すこし〈ネズミ〉をおしのけた。家のまえのどしゃぶりの雨の中に、小さな女の子が立っていた。上からでは、足と、顔やかたにたれさがったもじゃもじゃの黒いかみしか見えなかった。

「もう六分間もあそこに立っているんだ！」とつぜんブービがいった。ブービは時計は持っていなかったけれど、時間を知るすごい力を持っていた。それは、ほんのすこしのまをおいて、グーグー鳴る腹の虫のおかげだった。ブービはそれをいつまでもほうっておかなかったから、すごい大ぐいで、クラブ一のでぶだった。怪力ペ

ーターは、あいつはまるで毎朝新しく空気をふきこまれてるみたいだといっていたが、ブービはいっこうにへいきだった。

「いったいなにをしてるんだろう。」ブービはまたいった。

「ジプシーよ！」マリタがばかにするようにいった。「きっとスパイよ。あたしたちのようすをうかがってるんだわ。」

マリタはそういいながら、しかつめらしい顔をした。ペチコートが、そうだというように、カサカサ鳴った。

「ここにスパイするほどのものがあって？」ビムははらだたしげにいった。「あたしたち

原爆をつくってるわけじゃないわ。」
「そうよ。」〈ネズミ〉がいった。「そのとおりよ。」
そして、じゅんぐりにみんなの顔を見まわした。
「でも……、」〈ネズミ〉は声の調子をかえていった。「ジプシーって、あくまと手をむすんでるのよ。手相も見るし、コーヒーのだしがらでもうらないをすることができるんだわ。なんでも——人の生き死にまであてるんだわ。」
「ばかなことをいうなよ！」怪力ペーターはいって、窓をあけてからだをのりだした。
「よう、なんで雨の中につっ立ってるんだい？　雨をすって大きくなろうってのかい？」
少女はなにも答えなかったので、ペーターはつけくわえた。「だったら、さか立ちをしろよ。足ものびるぞ。」
そしてピシャッと窓をしめた。

「あんなに長く雨の中に立ってるなんて頭がおかしいんだよ。」ブービがいった。
「あたしたちになにかたくらんでるのよ。ジプシーってどろぼうよ。だれでも知ってるわ！」マリタはあざけるようにいった。
怪力ペーターはよごれた右手をさしあげ、こわい顔をしていった。「そうだとも。ジプシーと握手をした者は、あとで、指をとられなかったか、かぞえてみないといけないんだ。」
ビムはみんなにかってにいわせておいたけれど、なにか身内につきあげてくるものがあって、もうだまっていられなかった。べつにえらぶったことはいいたくなかったけれど、とうとういわずにはいられなくなった。
「よくって、」ビムはいったが、いつもは雨あがりの空のように青い目が、いかりでうすむらさき色になっていた。「みんなわすれているわ。ジプシーだって人間よ。ほかの人たちとおなじように、いい人もわるい人もいるわ。どろぼうもいるかもしれないけど、ぜんぶがそうだとはかぎらないわ。あの子はあたしたちに用があるの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com